



TITLE:

經濟靜學と經濟動學(一)

AUTHOR(S):

米田, 庄太郎

CITATION:

米田, 庄太郎. 經濟靜學と經濟動學(一). 經濟論叢 1929, 29(3): 369-398

ISSUE DATE:

1929-09-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/129791>

RIGHT:

京都市帝國大學經濟學會 經濟叢論

第三號

第二十九卷

昭和四年九月一日發行

論 叢

相續税の弱點

法學博士 神戸 正雄

津藩の均田策

經濟學博士 本庄 榮治郎

經濟靜學と經濟動學

文學博士 米田 庄太郎

說 苑

我國の經費増加と物價の變動

經濟學士 小山田 小七

講 演

上海の社會狀態

法學士 櫻木 俊一

雜 錄

越前米浦の農民逃散

經濟學博士 黑 正 巖

獨逸^{に於ける}交通政策研究の現況

法學士 前田 稔 靖

投資トラストに關する一考察

經濟學士 一谷 藤一郎

艦船工場に於ける職工の生活

經濟學士 芝 元 一

物價指數に關する一論

經濟學士 木村 喜一郎

マイヤー文庫

經濟學博士 沙見 三 郎

近着外國經濟雜誌主要論題

經濟靜學と經濟動學 (一)

米田庄太郎

緒言

經濟靜學及び經濟動學の概念の始源——ゼ・エス・ミル

ミルの經濟靜學及び經濟動學の概念を、其の後益々精練するに至らしめたる方法論的根本動機

經濟靜學の概念の精練の發展——クラーク、シユムペター、カッセル、パレト（以上本號掲載）

經濟動學の概念の精練の發展——フォゲル、ホネツガー、フエーゲリン

經濟靜學及び經濟動學の概念の正當なる規定

(一)(二)(三)(四)(五)(六)

(一) 緒言

私は前號の拙稿中に述べし如く、今日の米國經濟學の諸方針中、限界經濟學と稱せられるもの及び制度經濟學と稱せられるものは、方法論上から見て科學としての經濟學の根本的二部門と認めらる可き、經濟靜學或は靜態經濟學と稱せられるもの、及び經濟動學或は動態經濟學と稱せられるもの、本質を、夫れ夫れ比較的に最もよく發揮するものであるが故に、方法論上から今日の

米國經濟學を批判的に考察せんとするに當つて、吾人の最とも注目す可きものであると考へるのである。併し科學としての經濟學の根本的二部門を、經濟靜學或は靜態經濟學及び經濟動學或は動態經濟學と稱することが、果して正當であるや否やは問題であるが、此の問題よりも一層先決的な問題は、兩者の概念の精確なる規定である。是れ兩者の概念は常に米國の經濟學に於てのみならず、其他の諸國の經濟學に於ても種々様々に規定されて居るからである。殊に其の規定は、方法論上から嚴密に考察すると、一般に精確でなく、曖昧であるからである。要するに科學としての經濟學の根本的二部門を、經濟靜學及び經濟動學と稱することが、正當であるや否やは、つまり兩者の概念の規定如何によつて決定されるのであるが、然るに今日何れの國の經濟學に於ても兩者の概念は、まだ方法論的に精確に規定されて居ない。されば此處に最とも根本的な問題となるは、兩者の概念の方法論的に精確なる規定である。かくて私は本論文に於ては主として此の問題を考究し、夫れによりて經濟學の根本的二部門を經濟靜學及び經濟動學と稱することが、果して正當であるや否やを決定したいと思ふ。

今經濟靜學及び經濟動學の概念を、方法論的に精確に規定せんとするに當つて、私は先づ兩者を經濟學の根本的二部門と見る思想は、如何にして發生したかを考察し、次に今日までに規定されたる兩者の概念を批判的に吟味し、終りに兩者の概念の方法論的に精確なる規定を試みると云

ふ三段の順序に於て、論述して行きたいと思ふ。

(二) 經濟靜學及び經濟動學の概念の

始源——ゼ・エス・ミル

經濟學を如何様にか、根本的に、經濟靜學と經濟動學とに大別せんとする思想或は傾向は、實質的には既にアダム・スミス及び其の後の古典經濟學者の間に存在して居たと、考へ得られないことはない。併し始めて明白に、經濟學を右の二部門に大別せんとしたのは、ゼ・エス・ミルであると思ふ。さればさきに述べし如く、ミルは經濟學方法論を始めて組織的に明白に論述せんとした經濟學者であると同時に又、經濟學を始めて明白に經濟靜學と經濟動學とに大別せんとした經濟學者である。かくて經濟靜學及び經濟動學の概念の研究に於て、歴史的には先づミルの概念を其の始源として考察することが肝要であると思ふ。

今歴史的に見て、最初の經濟靜學及び經濟動學の概念と認めらる可きミルの概念を考察するに當つて、社會學者が殊に興味を感ずることは、ミルは彼の經濟靜學及び動學の概念を、コントの社會靜學及び社會動學の概念から引き出したと思はれる事實である。されば經濟學に於ける靜學と動學との區別及び概念は、歴史的にはつまり社會學に於ける兩者の區別及び概念に依て立てら

れたるものである。併し此處に注意す可きは、ミルが彼の社會科學一般方法論を組織的に論述して居る「論理學體系」第六篇に於ては、彼は社會學に就てはコントに從ふて社會靜學と社會動學との區別を立て、且つ之を大に重要視して居るが、經濟學に就ては此の區別を立て、居ないことである。

(尙ほコントの社會靜學と社會動學との區別及び概念と、ミルの社會靜學と社會動學との區別及び概念とは、大體一致にして居るに拘らず、又其の間に社會學上重要視す可き微妙なる差異が存立すると思はれるので、私は兩者の一致と共るが、此處では此問題を論ずる暇はないから、之れに觸れずに置く。) 夫れは同書に於ては、ミルは只經濟學方法

論の大要を論ずるだけを目的とし、之を詳しく論述しようとは考へて居なかつたが爲めであるか、又は他の理由によるのであるか、私はまだ其の點に就て別に研究して居ないから、何とも云ひ得ないが、とにかく彼が經濟靜學と動學との區別を明かに論述して居るのは、「經濟學原理」第四篇第一章第一節に於てある、然らば彼は經濟學の根本的の二部門として、如何に經濟靜學と經濟動學とを區別せんとしたか。私は上に述べし如く、經濟靜學及び動學の概念の發達を研究するには、ミルの概念から出發することが肝要であると考へるのであるから、本節に於ては特に彼の概念を、稍々詳しく考察したいと思ふ。そうして左に先づ彼自身の言述を引用して置く。

前三篇は一の數學的用語の巧みな一般化によりて、經濟の靜學 (the Statics of the subject) と稱せられたもの、本書の許すだけ詳しく考察を包含する。夫れの中に、吾人は經濟的事實の全範疇を概観し、如何に其等の事實が原因及び結果として相互に關係するか、如何なる事情が生産、労働の使用、資本及び人口等の分量を決定するか、如何なる法則が地代、利潤及び賃金を規制するか、如何なる條件の下で、又如何なる割合に於て、貨物が個人人間及び國民間に交換されるかを吟味した。かくて吾人は、同時に存在すると考へられた、社會の經濟的諸現象の集團的考察を成就した。そうして一定の程度まで、其等の經濟的諸現象の相互依存關係を確定した。かくて今や吾人は其等の經濟的諸現象の或物の狀態が知られた時には、他の最も多くのもの、

同期間の狀態を、一般的に推測し得るであらう。されど總て其等の知識は、只靜止し變動しない社會の經濟的法則を吾人に與へるだけである。吾人は尙ほ人類の經濟狀態を、變動し得るものとして、否な人類の最も進歩せる諸部分に於て、又其等の諸部分の影響が及ぼされる總ての地域に於て、常に進歩的變動をなしつゝあるものとして考察せねばならぬ。吾人は其等の變動或は變化は如何なるものであるか、又其等の變動の法則は如何なるものであるか、更に其等の變動の最後の傾向は如何なるものであるかを、考察せねばならぬ。かくて吾人は吾人の均衡の理論に、運動の理論、即ち經濟の靜學に經濟の動學を加へねばならぬ。

今此の經濟の動學の研究に於て、既に知られ又承認されたる諸作動力の作用を探索することから始めるのは當然である。そして社會の經濟が受ける可き諸變化は如何にあらうとも、とにかく此處に爭はれない一の變化が、現に進行して居る。世界の主要なる諸國に於て、又其等の諸國の影響を受けて居る他の諸國に於て、年々又代々殆んど停止することなしに續いて居る處の、少なくとも一の進歩的運動がある。夫れは富に於ける一進歩、即ち物質的繁榮と稱せられて居るものに於ける一の進歩である。吾人が文明國民と稱し慣れて居る總ての國民は、生産及び人口に於て漸次に増大して居る。そうして常に其等の諸國民が、生産及び人口に於て尙ほ増大し續けるであらうと云ふことを、疑ふ可き理由が在しないのみならず、更に世界の他の諸國民の最も多くも、(まだ建設されて居ないものをも含めて)、相次で同じ途に上るであらうと云ふことも疑ふ可き理由は在しない。されば此の進歩的變化の性質及び成行き、此の變化を構成する諸要素、及び此の變化が是れまで吾人の研究し來れる種々なる經濟的事實殊に貨銀、利潤、地代、價值及び物價等の上に生ずる結果を吟味することは、吾人の第一の目的であるであらう。(Principles of Political Economy, Book IV, Chapter I, § 1.)

ミルは以上述べし如くに、彼の經濟靜學及び經濟動學の概念を一般的に規定したのであるが、要するに彼は彼の社會學概念に於て社會の全體狀態を靜態と動態とに區別し、前者を對象とする社會學の部門を社會靜學、又後者を對象とする社會學の部門を社會動學と稱せるに準じて、社會の經濟狀態をも靜態と動態とに區別し、前者を對象とする經濟學の部門を經濟靜學、又後者を對象とする經濟學の部門を經濟動學と稱したのである。そうして右に引用せる彼の言述中に示されて居る如く、彼は「經濟學原理」五篇中、始めの三篇に於ては經濟靜學を論述し、後の二篇に於て

は經濟動學を論述して居る。然るに始めの三篇即ち經濟靜學に於ては、彼は傳統的に又普通に、理論經濟學と稱せられるもの、殆んど總ての問題を詳しく論述して居るので、傳統的な又普通の理論經濟學の概念に従へば、科學としての彼の經濟學の研究は、始めの三篇即ち經濟靜學に於て大體上完成して居る。尙ほ第五篇「政府の影響に就て」は、主として財政問題を論究して居るので、今日では一の獨立なる學問として財政學と稱せられて居るものに當る。かくて嚴密に云へば、彼は彼が經濟靜學と稱する經濟學の根本の一部門に對して、經濟動學と稱する他の根本的部門を論究し居るのは、只第四篇「生産及び分配に於ける社會の進歩の影響」、即ち全五篇中の最も短き一篇に於てだけである。そうして同篇の論述は主として哲學的及び實際的であるので、かくて彼が經濟動學と稱するものは、彼の經濟靜學と稱するものとは、其の學問論的性質を異にして居る。要するに彼の經濟靜學は本來科學的なものであるが、之に反して彼の經濟動學は本來哲學的及び實際的なものにして、其の後獨逸の經濟學に於ては理論經濟學に對して實際經濟學と稱せられるもの、及び近來特に經濟哲學と稱せられて居るもの、粗雑な混合物である。

かくてミルの解するが如き意味にて、經濟靜學と經濟動學とを區別するに於ては、之を科學としての經濟學或は理論經濟學の根本的二部門と見ることは、學門論上疑問となる、否な學門論上承認され難いこととなる。是れミルの如くに經濟動學の概念を規定するに於ては、科學としての

經濟學が、其の根本の一部門として哲學的な又實際的な方面をも含み、純然たる一の科學ではないことになるからである。學問論上から嚴密に考察するに於ては、何れの對象體系の研究も、夫れが一の哲學的學科として建設される以上は、如何なる部門に區別されるも、各部門は本來哲學的なるものであらねばならず、又夫れが一の實際的學科として建設される以上は、如何なる部門に區別されるも、各部門は本來實際的なるものであらねばならぬと同様に、夫れが一の科學として建設される以上は、如何なる部門に區別されるも、各部門は本來科學的なるものであらねばならない。其の一部門は科學的なものにして、他の部門は哲學的なものであるとか、又は實際的なものであるとか云ふが如き部門別けは、學問論上承認され難いのである。さればミルの經濟靜學及び經濟動學の概念が、夫れ夫れ上に述べしが如き學問論的性質のものであるとすれば、兩者は彼の考へるが如き科學としての經濟學或は理論經濟學の根本的二部門ではなく、科學としての經濟學としては、只經濟靜學が存立するのみにして、經濟動學は經濟哲學或は實際經濟學を意味するものであると云はねばならぬ。

併し後に論述する處によりて知られる如く、ミル以後及び今日の經濟學の大家にして、經濟靜學と經濟動學とを區別する人々の間にありても、經濟靜學を本來科學的或は純理論的なものと見るに對して、經濟動學を本來大なり小なり哲學的なものの、或は實際的なものと見るのは一

般の傾向にして、今日に於ても純科學的なものとしての經濟動學の概念を確立した人は殆んどないかと思はれる。かくて科學としての經濟學を、根本的に經濟靜學と經濟動學とに區別せんとする見解をとらない以上は問題はないが、かゝる見解をとる以上は、純科學的なものとしての經濟動學の概念を確立することは、經濟學方法論上甚だ重要な一問題であるのである。

さてミルの經濟靜學の概念は、詳しく吟味すると、最初の經濟靜學の概念として當然豫期される如く、甚だ粗雑なものであるが、しかも經濟生活の靜態に於ける經濟的諸現象の均衡の究明を、其の根本的任務と見る點に於て、經濟靜學の一般的概念の中心點を、既に明白に發揮して居ることが見出される。其の後經濟靜學の概念は、後に述べる如く益々精確に規定されて來たが、併し其の中心點となつて居るものは常に經濟現象の均衡の概念である。又ミルの經濟動學はさきに述べし如く、本來科學的なものでなく、哲學的な又實際的なものにして、更に其の何れとして粗雑なものであるが、しかも「(人類の經濟狀態に於ける)其等の變化或は變動は如何なるものであるか、又其等の變動の法則は如何なるものであるか、更に其等の變動の終極の傾向は如何なるものであるかを考察す可き」ものとしての彼の經濟動學の一般的形式的概念は、ヤハリ其の後の經濟動學の概念の發達の中心點を、大體上明白に指示して居る。要するにミルの經濟靜學及び經濟動學の概念は甚だ粗雑であるが、しかも兩者の中心點を大體上明かに指示し發揮して居ると

認め得られるので、かくて私は其後の經濟靜學及び經濟動學の概念の種々なる規定或は發達を、つまりミルの概念が學問論的或は方法論的に、益々精確に規定されたるものとして考察し、今日如何なる歸結に到着して居るかを見定め、之を批判的に吟味することによりて、科學としての經濟學の根本的二部門としての經濟靜學及び經濟動學の概念は、結局方法論的に如何に規定せる可きものなるかを論斷したいと思ふ。然るに今ミル以後の經濟靜學及び經濟動學の概念の種々なる規定或は發達を、右の主旨にて考察せんとするに當つて、特に注意す可き一問題がある。夫れはつまり其の後ミルの經濟靜學及び經濟動學の概念を、益々精練し、精確に規定するに至らしめたる方法論的動機は何であるかと云ふ問題である。私は先づ其等の方法論的動機を究明し、夫れに基いてミルの概念の其後の發展を考察することゝする。

(三) ミルの經濟靜學及び經濟動學の概念を、其の後

益々精練するに至らしめたる方法論的根本動機

今日歐米何れの國の經濟學界にありても、科學としての經濟學の發達を促進しつゝある、二つの重要な方法論的根本動機が発見されるところは、其の一は總て科學の究竟の認識目標は、つまり出來るだけ精密なる知識に達着することであると云ふ方法論的原理に基いて、經濟現象の

科學的研究に於ても、出來るだけ精密なる知識を收得せんとし、かくて經濟學的知識を益々精密化して、以て經濟學を一の精密科學として發展させ、科學としての經濟學の本質を充分に發揮せんとする動機である。其の二は總て科學の究竟の認識目標は、つまり出來るだけ現實的な知識に達着することであると云ふ方法論的原理に基いて、經濟現象の科學的研究に於ても、出來るだけ現實的な知識を收得せんとし、かくて經濟學的知識を益々現實的なものとなして、以て經濟學を現實科學として發展させ、科學としての經濟學の本質を充分に發揮せんとする動機である。私は便宜上前者を精密科學的動機と稱し、後者を現實科學的動機と稱して置く。そうして此等二種の動機及び其の基礎とする方法論的或は認識論的原理に就ては、後に批判的に論究するが、此處で私の注意したいのは、右の二種の方法論的動機は今日殊に著しく發動して居るに拘らず、決して今日始めて生起せるものでなく、科學としての經濟學の建設が企だてられた始めから存在し、其の後の發達の根本動機として常に作用して居たものであると云ふこと、及び一般に解されて居る意味では、右の二種の方法論的動機は根本的には決して相調和され、融合され得ないものにして、相離れ相背いて發達し行く傾向を有するものであると云ふことである。

吾人は先づアダム・スミスの經濟學に於ては、二種の方法論的動機が相當な強さで相共に働いて居たことを見る。かくてアダム・スミスの經濟學は、一方に於てはあまり精密でないと同時に

に、他方に於てはカナリ現實的であつた。然るに其の後古典經濟學に於ては、精密科學的動機が大に勢力を振ふて、現實科學的動機を壓倒し、經濟學を一の精密科學として發達せんとする努力が専ら行はれて、遂に經濟學の數學化が企だてられ、數理經濟學の發達を見るに至つたのである。併し又其の反動として、現實科學的動機が大に重要視され、經濟學を出来るだけ現實的なる科學として發達せんとする企だてが、先づ獨逸舊歷史派經濟學者から連續的に勃興して來た。然るにミルの「經濟學原理」は千八百四十八年、即ち獨逸舊歷史派經濟學の興り始めた頃に公にされたものであるが、彼は一方に於ては古典經濟學の精神を傳承し、精密科學的動機を大に重要視して經濟靜學を立てたが、併し經濟學を特に數學化せんとするまでには至らなかつたので、僅かに國際價格の法則を論ずるに當つて、一定の數學式を用ひて居るだけである。(Principles of Political Economy, Book III, Chapter XVII, § 7.) 同時に他方に於ては、彼は又サン・シモン及びコントの影響を受けて、現實科學的動機をも大に重要視し、殊にコントの社會靜學と社會動學との區別に従ふて、精密なる社會靜學の部門に繼續する他の部門として、現實的なる經濟動學を建設せんとした。但し彼は經濟動學を大に現實的ならしめんとして、さきに述べし如くあまりに實際的な又哲學的なものとして仕舞ふたのであるが、併し矢張りさきに述べし如く、其の後の經濟動學の概念の發達に於ても、實際的及び哲學的傾向は一般に著しく認められるのであるから、

歴史的には彼は大體上經濟動學の概念をも始めて樹立したと云ひ得られるのである。要するにミルは經濟學の發達を始めから支配せる二種の方法論的動機の何れを偏重せず、兩者を大體上同等に重要視し、かくて經濟學を根本的に二部門に大別し、精密科學的動機に従ふて經濟靜學を、又現實科學的動機に従ふて經濟動學を建設せんと企だてた最初の經濟學者であると、大體上認め得られるのである。

併し此處に特に注意す可きは、精密科學的動機の要求がミルの經濟靜學に於て與へられて居るが如き精密性の程度で満足され、又現實科學的動機の要求がミルの經濟動學に於て與へられて居る如き現實性の程度で満足されて居る以上は、其等の二種の動機の間で衝突は起らないが、併し兩者共に其等の程度に於ては到底満足されて居るものでないことである。精密科學的動機は更に遙かにより大なる精密程度を要求すると同じく、現實科學的動機も亦更に遙かにより大なる現實程度を要求する。然るに一般に知識の精密性が増大するほど、知識は益々抽象的となりて現實を離れ、現實性を失なふて行くが、之れに反して知識の現實性が増大するほど、知識は益々具體的となりて精密性を失なふて行くのである。かくて精密科學的動機が一定の程度以上に強まるに於ては、理論經濟學としては偏に經濟靜學を重要視して、益々之を精密科學として發展せんとすると同時に、經濟動學を哲學的又は實際的な經濟學としては重要視するも、理論經濟學

としては、或は科學としての經濟學としては之を輕視し、又は排斥せんとする傾向が自から發達し、之れに反して現實科學的動機が一定の程度以上に強まると、抽象的な非現實的な經濟靜學を輕視し又は排斥し、そうして經濟動學を根本的には實際的哲學的意義を有する現實的な經濟學として、又は純粹に現實的な科學として精練されたる經濟學として大に重要視し、益々之を現實化せんとする傾向が、自から發達するのである。

私はミルの經濟靜學及び經濟動學の概念が、其の後益々精確に規定されて來たのは、つまり右の二つの傾向の發達に基因すると考へるのであるが、此の見解から考察すると、獨逸新歴史派經濟學者と塊太利經濟學者との間に起れる方法論爭は、つまり現實科學的動機を特に重要視する傾向と、精密科學的動機を特に重要視する傾向との間に起れる、最も顯著なる一衝突であるところである。又後に特に詳しく論述せんとする、今日の米國經濟學に於ける限界經濟學の方針と、制度經濟學の方針との反對或は衝突も、やはり右の二種の傾向の發達から生ぜる一現象に外ならないと考へられるのである。

さて私はミルの經濟靜學及び經濟動學の概念が、其の後益々精練され、精確に規定されるに至れる方法論的動機を、右に述べしが如くに解し、是より其の精練の發展の一般的形勢を簡單に論述して、今日如何なる歸結に達着して居るかを究明せんとするのであるが、先づ經濟靜學の概念

の精練の發展の方面から考察することゝする。

(四) 經濟靜學の概念の精練の發展

抑々力學に於ては靜學と動學との概念は一の相關概念にして、一を離れて他を考へることが出来ないのであるが、今之を經濟學に移入するに於ては、經濟靜學と經濟動學との概念もヤハリ一の相關概念として存立し、一を立てる以上は又他を立てねばならない。然るに力學に於ては靜學も動學も共に同等に精密なる知識を與へるものであるから、精密科學的動機から見て兩者は同等に重要視されるが、經濟學にありては充分に精密なる知識は只經濟靜態に就て獲得されるだけで、經濟動態に就ては夫れは到底望まれ難い。そうして經濟動態に關する知識は、現實的であるほど自から不精密とならざるを得ない。かくて經濟學にありては力學に於けるとは異なりて、經濟靜態に就て出来るだけ精密なる知識を獲得せんとする精密科學的動機と、經濟動態に就て出来るだけ現實的なる知識を獲得せんとする動機とは、實質的には自から相離れて或は相反して發達する傾向が存在する。そうして精密科學的動機を特に重要視する經濟學者は、靜學と動學との概念は一の相關概念であるから、經濟靜學の概念を立てる以上は、又經濟動學の概念をも立てざるを得ないが、しかも其の専ら力を注いだのは經濟靜學の發達にして、此處に其等の經濟學者によ

りて、經濟靜學の概念は益々精練され、益々精確に規定されたのである。それで私は先づ其等の經濟學者によりて、經濟靜學の概念が如何に精練されたかを考察し、尙ほ又其等の經濟學者は經濟靜學の概念を精練するに伴ふて、經濟動學の概念を如何に規定せんとしたかを考察したいと思ふ。

今私が經濟靜學の概念の精練と云ふは、さきに述べし處によりて知られる如く、つまり經濟現象の益々精密なる知識を獲得することを認識目標となす科學として、經濟靜學の概念を規定して行くことを意味する。然るに最も精密なる知識と云へば、夫れは即ち數學的知識である。かくて精密科學的動機の研究目的は、つまり數學的知識を獲得することに在ると認めらる可きである。されば經濟靜學の概念の精練の發展は、遂には數理經濟學の概念に到着せざるを得ない。そうして吾人は數理經濟學を以て、經濟靜學の概念の發展の終極點と認めねばならぬ。かくて私は經濟靜學の概念の精練の發展とは、つまり單に數學的考へ方に従ふて經濟現象を研究すると云ふが如き階段、即ちミルの經濟靜學に於て見るが如く、單に經濟現象を同時的に共存するもの、均衡として考察すると云ふぐらひの階段から出發して、段々數學式を適用して研究し、經濟現象の均衡を數學式に於て表はさんと努め、遂には最も進歩せる數理經濟學に於て見るが如く、單に考へ方に於てのみならず、實質的にも數學化して研究するに至る、其の進み行きを意味するもの

と解するのである。併し經濟靜學の概念の精練の發展を右の如くに解するに於ては、夫れは主として一の論理的發展を意味するものにして、嚴密な歴史的發展を意味するものでないことは明白である。但し論理的發展と歴史的發展との關係に就ては、社會學にありてはコントの科學の體統的分類論に關して、又近代哲學にありてはヘーゲルの發展思想に關して、夫れ夫れ重大なる一問題として論争されて居るが、私は論理的發展と歴史的發展とは、必ずしも合致せねばならぬものでないと思ふ見解をとつて居る。そうして經濟靜學の發展は、其の一適例を示すものと見る。要するに經濟現象の研究に數學を應用せんとする企ては、Fisher, Bibliography of Mathematical Economics (Bacon, *Reserches into the Mathematical Principles of the Theory of Wealth* by Augustin Cournot)によりても學ばれる如く、既にアダム・スミス以前から始まつて居り、又ミル以前にベーコンの英譯せる右のクルーノの著作(千八百三十八年出版)の如きものが、既に公にされて居たのである。

されば私は經濟靜學の概念の精練の發展を考察せんとするに當つて、其の進み行きを嚴密な歴史的順序に依らず、主として論理的順序に従ふて、大體上二つの階段に別ちたいと思ふ。其の第一階段は、考へ方に於て本來數學的であるのみならず、更にミル以上に數學式を適用して經濟現象の諸關係を研究せんとするか、しかも數理經濟學はど充分に數學化せんとは、敢て考へない或

は企てない階段にして、其の第二階段は即ち數理經濟學の階段である。但し右の第一階段と第二階段とを事實上嚴格に區別することは困難であるから、夫れは只大體上の區別であることを了解されたい。又私が此處に第一階段に屬すると見做す經濟學者は随分多いので、そうして彼等の間には數學化の程度に種々なる差異がある。随ふて此の階段概念もヤハリ甚だ一般的なるものであるとして了解されたい。

却說私は右に述べしが如き意味にて、經濟靜學の概念の精練の發展を、大體上二つの階段に別ち、各階段に屬すると見做される重要な經濟學者の經濟靜學の概念の精練、並に是れに伴ふて規定された經濟動學の概念を簡單ながら一々考察し、今日までに到着されたる經濟靜學の概念の最とも精確なる規定は、如何なるものであるかを見定め、又夫れに伴ふて規定された經濟動學の概念の精練を吟味したいと思ふのであるが、是れまでの論述にあまり多くの紙數を費やし、本號に於て残る處の紙數では到底其の目的を達することが出来ないから、已を得ず只私が第一階段及び第二階段の最とも代表的と見做す數人の經濟學者の所說に就て、今日までに到着されたる經濟靜學の概念の最とも精密なる規定と認めるもの、及び夫れに附隨して規定されたる經濟動學の現實的なる概念の一定の型を、甚だ簡單に論述するに止める。

第一階段に就ては私は此處にクラーク、シユムペター及びカッセルの三氏の說を考察したいと

思ふが、先づクラークの説に就ては、其の經濟靜學の實質的根本思想は、後に今日の米國經濟學に於ける限界經濟學の方針の代表的なるものとして、稍々詳しく論述したいと思ふから、此處では只同氏の精練されたる經濟靜學の概念、及び夫れに附隨して規定されたる經濟動學の概念の一般を述べるだけに止める。(Clark, The Distribution of Wealth, 1899, Essentials of Economic Theory, 1907.)

クラークの説によれば、現實なる一切の經濟は動的であるが、殊に現代經濟學者が主として取扱ふ現代經濟は甚だ動的である。吾人は到る處に變動及び進歩を見る。現代經濟社會は絶へず新しき形態をとり、新しき機能を營んで居る。併し一切の變化變動の真中に、何れの瞬間に於ても賃銀及び利子が合致せんとする一定の率を確定する諸勢力が働いて居る。海が如何に荒れても、大小高低の波を貫く一の理想的水平面があつて、荒れまはる水の現實なる平面は、夫れを中心として上下すると同じく、最も動亂する市場にありても、現實なる價格、賃銀及び利子が合致せんとする一定の靜的標準がある。そうして夫れは完全なる自由競争によりて實現されるものである。要するに現實なる動的經濟の中に、常に靜的均衡を求める諸勢力が生動して居るのであるが、尙ほ此等の靜的諸勢力は單に動的現實經濟の中に生動して居ると云ふだけでなく、更に夫れを支配する勢力であるのである。

此等の諸勢力は價格を精密に其の自然的標準に於て保持することは出来ないが、併し常に其の標準の近くを上下させて居る。其等の勢力は現實なる賃銀及び利子を、

常に自然的率に比較的に接近させて居る。若し其等の諸勢力が擾亂されずに働くならば、靜的均衡は實現されるであらう。

靜的均衡は決して實現されないものであるから、夫れは一の假想物である。一切の現實なる經濟は動的であつて、現實には靜的經濟は存在しない。東洋諸國の經濟も、只歐米諸國の經濟より、より少なく變動するだけである。しかも夫れに拘らず假想的靜的經濟を研究することは甚だ肝要である。是れまさしく假想的靜的狀態に於て作用する諸勢力は、動的狀態に於て作用し続けるからである。更に靜的勢力は動的勢力よりも一層強大でさえあるからである。されば吾人は假想的靜的狀態を研究する時に、實は近世進歩的狀態の現實を研究しつゝあるのである。かくて經濟靜學の理論は、何等擾亂するものがない場合に、靜的諸勢力は如何に働くであらうかを研究す可きものである。そうして其の最も主要なる結論は、總て靜的所得は限界生産力の法則によりて直接に決定されると云ふことに於て、見出されるのである。

クラークは經濟靜學の概念を、以上述べし如くに精練し、規定したのであるが、更に彼の經濟靜學の概念の精密なる精練として注目す可きは、靜的經濟に於ては利潤或は企業的利得は存在しない、隨ふて夫れは經濟靜學に於ては研究され得ないと見たことである。要するにクラークは靜的經濟或は經濟靜態は、完全なる自由競争が行はれ、勞働及び資本の完全なる移動性が存在する場合に實現される均衡狀態に於て存立する經濟にして、其の中には企業家の利得は成立しないといふ

考へ、又只人口が増加せず、資本が増大せず、つまり經濟的條件に於ける何等の變化變動も起らない時にのみ、經濟はかゝる状態を實現するものにして、夫れはつまり現實には存在しない假想的なものであると認め、そうしてかゝる非現實的假想的經濟状態を對象として、精密なる經濟法則の知識を求めるものが、即ち經濟靜學であると考へたのである。然らば夫れと相伴なふて、クラークは如何に經濟動學の概念を規定したか。

上に述べし如くクラークは、現實なる經濟は總て動的であるとするのであるが、併し甚だ複雑なる現實的動的經濟を、其儘に直ちに科學的研究の對象となすことは不可能であると考へ、そうして先づ孤立化法或は隔離法 (the isolating method) によりて經濟靜態を理論的に構成し、之を對象とする經濟靜學の概念を方法論的に確立したのである。かくて彼は方法論的には、經濟動態は經濟靜態を擾亂する諸勢力の作用によりて成立するものと考へ、其の考へに基いて經濟動學の概念を規定したのである。

クラークは經濟的均衡を擾亂する主要なる五種の勢力を認めた。夫れは(1)人口の増長、(2)資本の増長、(3)生産方法に於ける變動、(4)産業組織に於ける變動、(5)消費者の慾望に於ける變動等である。そうして彼は其等の勢力の作用によつて賃銀、利子、物價等が夫れ夫れの自然率或は均衡から偏斜する、其等の偏斜を確定することが、即ち經濟動學の任務であると考へたのである。要するにクラークは、經濟動學は「徹底的に理論的な」經濟靜學に基いて、現實的經濟状態を究明するものにして、經濟靜學が「徹底的に理論的な」にして非現實的なるに對し、經濟動學の顯著なる特徴は現實主義であると認めた。

併し右の經濟動學の概念を嚴密に規定する爲めには、更に經濟動學と經濟史或はクラークが歴史經濟學と稱するものととの區別を確定せねばならぬ。そうしてクラークの論ずる處によれば、歴史經濟學は經濟的進化或は發達が産出する經濟的構造の差異を記述し、又之を測定するが、經濟動學は何故に經濟的進化が行はれたか、又何故に其の進化があるが如くに行はれたかを説明するものである。例へば「歴史經濟學は、移住及び器械的發明の行はれた百年間に成就された結果を記述し、測定するが、經濟動學の理論は其等の結果を其の諸原因に結び附け、經濟進化の哲學を呈供するであらう。」更にクラークは、研究方法に於て兩者を區別し、歴史經濟學は主として歸納法を使用するに對して、經濟動學は主として演繹法を使用すると述べて居る。

右に述べし處によりて、クラークは彼の經濟動學を、如何に歴史經濟學或は經濟史から區別したかを學ぶことが出来るが、更に彼は經濟動學の理論が益々完成するにつれて、將來に豫期さる可き變動の種類を、吾人が益々大なる確信を以て言述することを、可能ならしめると述べて居る。かくて彼の經濟動學の概念は、哲學的及び實際的意義を多分に含蓄するものである。されば彼は經濟動學を經濟的均衡からの偏斜を研究するものと解し、かくて經濟的均衡を研究する經濟靜學に對して、科學としての經濟學、根本的一部門をなすものと見て居たに拘らず、彼の經濟動學の概念は實質的には純科學的なものでなく、大に哲學的及び實際的性質を具有し、隨ふて其の範域の廣大漠然たるものにして、嚴密には科學としての經濟學の根本的一部門とは認め得られないものである。

次に私はシユムペターによりて、經濟靜學の概念が如何に精練され、又夫れに伴ふて經濟動學の概念が、如何に規定されたかを考察する。(Schumpeter, Wesen und Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie, 1908. Theorie der Wirtschaftlichen Entwicklung, 1912. Vergangenheit und

Zukunft der Sozialwissenschaften, 1915.)

今シユムベターの經濟靜學の概念に於て先づ注目す可きは、彼は其の對象として只財貨諸分量の一定關係即ち交換のみを認め、更に其の交換を經濟的に行動する人間から抽象して考察して居ることである。「吾人は今一般的に、行動する人間を考察するのでなく、只其等の人間の所有する財貨量を考察するだけである。吾人は財貨量の變動、一層正しく云へば財貨量の變動の一定の仕方をも、夫れが夫れを事實上產

出する人間なしに、夫れ自身自動的に行はれるかの如くに記述し、更に考察せんとするのである。」かくて彼の考へによれば經濟靜學の範域に於て存在する總てのもの、依て以て吾人の現實態諸形象が構成される總てのものは、價值諸機能と財貨諸量とで

ある。そうして經濟靜學の理論の任務は、つまり與へられたる經濟的諸量に就て、市場取引が依て以て行はれる均衡狀態を確定することである。されば經濟的諸量は先づ與へられねばならぬ。

更に夫れは不變的なものとして與へられねばならぬ。そうして其等の諸量が變動すると認められるや否や、見出されたる均衡は直ちに消失するか、又は何等の均衡狀態も現はれないであらう。

但し此の場合にシユムベターが均衡狀態と云ふは、其の體系の中に如何なる變動傾向も缺けて居る一狀態を意味するので、彼はつまり各需要者が各財貨を、最後に獲得されたる部分量が、一切の同等な強さを有する欲望發動を充足する分量に於て、獲得した時に、此處に均衡狀態が實現されると見るのである。尙ほ此處にシユムベターは需要と云ふは又供給を意味するものにして、供給と需要とは二つの同質的現象であると解し、隨ふて需要曲線と、夫れと本質的に異なる供給

曲線とが相並立するのではなく、相交又する二つの需要曲線が存立するのであると見て居る。かくては彼は結局經濟靜學の任務は、與へられたる價值諸機能及び財貨諸量に於ける二つの需要曲線の交叉點が、何處に存立するかを確定することであると、考へるのである。

今シユムベターの右の經濟靜學の概念は、あまりに抽象的にして、其の範域をあまりに狭小ならしめた云ふ非難が加へられて居るが、併し經濟現象に就て出来るだけ精密なる知識を求める以上は、吾人は當然シユムベターの見解の如きものに到着せざるを得ないので、夫れは精密科學的動機が、經濟學に於て最後に到達す可き當然なる歸結と見做さる可きである。されば經濟靜學の概念は、精密科學的動機の要求の必然的所産として承認される以上は、シユムベターの見解は決して右の點に於て非難さる可きでない。併し此處に學問論上眞に重大なる一問題が起つてくる。夫れはシユムベターは彼の精密的に最ともよく精練せる經濟靜學の概念を、果して實際の研究に於て固持し得たか云ふ問題である。

此處に詳しく此の問題を論ずる紙面はないので、只簡単に結論を示すに止めるが、シユムベターは實際の研究に於て、屢々彼が經濟靜學の概念に於て限定した範域を越へざるを得なかつたので、彼は決して彼の經濟靜學の概念を固持して居ないのである。尚ほ注意す可きは、彼は理論上立てた彼の經濟靜學の概念と、經濟的進化的停滯して居ることを意味する、歴史的事實としての停滯狀態とを混同して居ることである。かくて彼は經濟靜學に於ても多少の貯蓄は可能であると見て居るが、夫れは歴史的事實としての停滯狀態に於ては可能であるが、併し彼が理論的に立てた經濟靜學の概念に於ては、全く不可能である可きである。要するにシユムベターの經濟靜學の概念に於ては、彼自身が承認して居る如く、企業家利得及び資本利子の問題が取扱はれないのみならず、貯蓄の問題を始め總て時間的意義を有する何れの經濟現象も、取扱はれ得ないのである。

却說シュベターは、彼の經濟靜學の概念を右に述べし如く大に精密的に規定したる後、夫れに伴ふて經濟動學の概念を如何に規定したかと云ふに、彼は企業家利得や資本利子の如き、現代經濟組織に於て甚だ重大なる諸問題は、經濟靜學に於て取扱はる可きものでなく、經濟動學に於て取扱はる可きものであると述べて居るから、彼の經濟動學は現代經濟に對して甚だ重要な意義を有す可きものであるが、然るに彼の經濟動學の概念の規定は、方法論上から見ると、甚だ曖昧であると思ふ。

今シュムペターの論ずる處によれば、經濟動學は總ての關係に於て經濟靜學とは、方法的にも亦内容的にも全く異なるものである。「靜學と動學とは全く相異なる二つの範疇にして、兩者は常に異なる問題を取扱ふ可きものであるのみならず、更に異なる方法を用ひ、又異なる材料に就て取扱ふ可きものである。兩者は同一の理論的構造の二章の如きものでなく、全く獨立する二つの建築物である。」然らばシュムペターは經濟動學の概念を詳しく如何に規定して居るか云ふに、種々論述したる後、結局左の如くに述べて居る。「動學から靜學を區別する精密な境界は、如何なるものであるか。吾々は此の問題を一般的に答へ、又絶對的に不可變的な規程を始めから是れに與へんとすることを、差し控へてあらう。」併し彼が經濟動學の取扱ふ可きものと見る諸問題を考察するに、夫れは經濟靜學の問題に比して大に具體的現實的である。例へば經濟靜學に於ては、只價值諸機能及び財貨諸分が取扱はれ、人間は全く抽象されて居るが、經濟動學に於ては人間が取扱はれ、更に其等の人間は企業家、銀行家、資本家、地主及び労働者等として、比較的に具體的な諸形態に於て取扱はれて居る。そうして其の取扱ひ方は又大に哲學的及び實際的意義を含蓄して居る。さればシュムペターの經濟動學の概念は、實質的にはクラークの經濟動學の概念、大體上一致して居ると思ふ。そうして經濟動學の概念を兩氏の如くに規定するに於ては、クラークの如く之を經濟靜學に對する理論經濟學の他の根本の一部門と見るよりは、寧ろシュムペターの如く、經濟靜學とは異なる一の經濟的學問と見る方が學問論上正當である。かくて科學としての經濟學の根本の一部門としての經濟動學の概念が、如何に規定すべきかは、改めて研究する可き問題として殘されて居る。

次に私はカッセルの説に就て、經濟靜學の概念は如何程精密に規定されて居るか、又夫れに伴ふて經濟動學の概念が如何に規定されて居るかを考察したいと思ふ。(Gustav Cassel, Theoretische

カッセルの論ずる處によれば、經濟は當該經濟團體の人間の數及び其の個人的欲望、並に其等經濟團體の總欲求も、常に不變に存続すると云ふ條件の下に於て、靜止的 *Stationar* である。併しかゝる靜止的經濟は現實に存在するものでなく、「一の大に單純化されたる前定」である。但しカッセルは靜止的と靜態的或は靜學的 *statisch* とを同じ意味に解して居る。然るに靜止的經濟の抽象程度に於ては、總ての經濟現象が觀察し得られるのでない。例へば貯蓄、かくて新しき資本の成立は觀察され得ない。かくて進歩と本質的に結び附いて居る諸現象をも研究し得る爲めには、吾人は靜止的經濟の第一或は最初の抽象の程度を低めなければならぬ。即ち靜止的經濟の概念に或成分を附加せねばならぬ。かくして「進歩的經濟」*die fortschreitende Wirtschaft* が成立するが、夫れも尙ほ甚だ高き程度の抽象物である。そうして只左の點に於て靜止的經濟から離れるだけである。即ち人口は一樣に、詳しく云へば毎年同じ百分率にて増加し、生産は變化しない途に於て、又個人の同様なる作業を以て遂行され、只人口の増加すると同様な關係に於て増加されると云ふことである。

カッセルは右の二種の一般の抽象、即ち靜止的經濟と進歩的經濟との二概念は、共に經濟學の理論の認識に役立つものと考へ、そうして其等二種の經濟概念に對立させて、經濟動態或は經濟動學の概念を構成し、經濟動學は先づ經濟靜學が靜止するもの又は一樣的に發達するものと見て、經濟生活に加へる研究に對して、必要缺く可からざる補充として役立つ可きであると述べて居る。尙ほ彼は靜止的及び進歩的經濟の理論の方法が演繹法であるに對して、經濟動學の研究の方法は歸納法であると考へて居る。

今さきに述べし如く、シユムペーターが經濟靜學の概念をあまりに嚴密、精密に規定せんとせるが爲め、實際の研究に於ては其の嚴密なる概念を其の儘に固持することが出來ずして、カッセルが進歩的經濟と稱するが如きものをも其の中に含めざるを得ないこととなり、夫れが爲めに非難

を受けた事情を顧慮すれば、カッセルの如く經濟靜學の概念を少しく擴張することは、論理的には其の嚴密性或は精密性を多少損傷するに拘らず、より適當な仕方であるかと思はれる。但し此の點に就ては後に稍々詳しく論じたいと思ふから、此處では夫れに觸れずに置き、そうしてカッセルの經濟動學の概念に就て、少しく論評するに止めるが、彼の如くに經濟動學の概念を規定するに於ては、彼自身も認めて居る如く、經濟動學は經濟靜學に對して理論經濟學の根本的一部門をなすものでなく、獨逸經濟學に於ては、一般に理論經濟學に對して實際經濟學と稱せられるものに當るのである。かくて吾人はカッセルに依つても、科學としての經濟學の根本的一部門としての、經濟動學の正當なる概念規定を學ぶことは出来ない。

終りに私は社會靜學の概念の精練の發展の第二階段と見るもの、即ち數理經濟學に就て、社會靜學の概念が如何に精練され、又夫れに伴ふて社會動學の概念が如何に規定されたかを考察する。但し此の問題に就ても、少なくとも Jevons, Walras, Edgeworth, Auspitz, Fisher, Pareto 等の數理經濟學の諸大家の説を考察する積りであつたが、最早紙面の餘白は殆んどなくなつたから遺憾ながら Pareto の説を考察するだけに止める。尚ほ是れに就ても其の極一般的考察を述べるに止めざるを得ない。

パレトは恐らくは數理經濟學を今日までの處で最もよく大成した人と思はれると思ふ。(Pareto, Cours d'économie politique, 1896 et 1897. Manuale d'economia politica, 1906. 佛譯 *Manuel d'économie politique*, 1909.) 併し夫れは勿論經濟靜學に就て云ひ得られるので、經濟動學に就ては

彼も只一般的に其の概念を規定し、又二三の問題を一般的に論述したいだけである。

經濟靜學の發達に於ける彼の功績が

如何に大なるかは、今日の伊太利の數理經濟學者アモロツが「パレトは經濟靜學の創設者であつた」と云ふて居ることや (Luigi Amoroso, *La meccanica economica*, 1924) 又リクツイがマーシャル的部分的諸均衡の理論から、ワルラによりて發展された均衡の一般理論が、パレトによりて如何に大成されたかを詳論し居るマン (Umberto Ricci, *Pareto e l'economia politica*, 1924) 及びビエトリ・トネルリがパレトの經濟的均衡の一般的情式を論究して居ること (Alfonso de Pietri-Tonelli, *Le equazioni generali dell'equilibrio economico di Vilfredo Pareto*, 1924) などによりて、明かに學ばれる。

パレトの數理經濟學或は純正經濟學の概念に就ては、上に舉げし諸著書の外に、參考すれば有益と思はれる幾多の小冊子や論文のあることは、Rocca e Spinetti, *Bibliografia di Pareto* によりて學ばれるが、私は今其等の小冊子や論文を一々あさる暇がなく、又且下私の手元には只 *Manuale d'economia politica* の伊太利語の原書があるだけであるから、此處では只同書に就て考察するだけに止める。但し同書はパレト門下の學者も、亦彼の批評家も共に、彼の數理經濟學の最も成熟せる思想を論述するものとして、一般に承認して居るものである。

尙ほパレトが同書に於て、時に彼の純正經濟學の概念を一般的に論じて居るのは、第三章「經濟的均衡の一般的概念」に於てであり、又特に彼の經濟動學を一般的に論じて居るのは、最後の章「具體的經濟現象」に於てであると思ふ。それで此處では其等の諸章によりて、彼の經濟靜學の概念及び大れに伴なふて規定されたる經濟動學の概念を、簡単に説述し、評價することとする。

パレトの論ずる處によれば、經濟學の一般的對象は、先づ人間が其の欲求 (desire) を充足する財物を獲得する爲めに行なふ處の、反復される大數の論理的行爲である。但し人間の行爲を論理的なるものと非論理的なるものとに大別するは、抽象法によるので、現實なる行爲は兩者を種々なる割合に於て混交するものである。かくて經濟學の一般的對象は、既に抽象的なものである。しかも右の如くに規定されて居る以上は、尙ほ大に具體的性質を有し、甚だ複合的であつて、其の儘にて直ちに科學の對象とされることは出来ない。吾人は更に數學的論理に従ふて、夫

れの中から嚴密に本質的でないものを除去し、夫れを根本的及び本質的諸要素に還元して考へねばならぬ。かくて經濟學は先づ純正經濟學と應用經濟學とに別たれる。純正經濟學は只根本的諸線によりてのみ構成される圖形を考究するものにして、應用經濟學はかゝる圖形に特殊的諸線の加はれる圖形を考究するものである。要するに經濟學の此等の二部門は、力學の二部門即ち理論力學と應用力學とに類比的なるものである。

更に純正經濟學は三部門に分たれる。其の一は靜學的部門にして、其の二は連續的諸均衡 (equilibrî successiv) を考察する動學的部門、其の三は經濟現象の運動を研究する動學的部門である。

此等の三部門の區別は具體的事實に對應するものにして、例へば今日巴理の取引所に於ける三分利佛國公債の平均價格は如何程であるかと云ふ問題は、靜學的問題である。同種の他の問題は、夫れの明日の平均價格、明後日の平均價格、等々は如何程であらうか、如何なる法則に従ふて其等の平均價格は變動するか、夫れは増加し行くか、減少し行くかと云ふことにして、此の問題は連續的均衡の問題である。三分利佛國公債の價格の運動は、如何なる法則によりて支配されるかと云ふ問題は、經濟動學の問題である。そうしてバレットの見る處によれば、經濟靜學の理論は大に進歩して居るが、連續的均衡の理論に就ては甚だ僅かな微候が認められるだけであり、更に動學の理論に就ては、一の特殊の理論即ち經濟的危機の理論の外は、全く知られて居ない。

以上述べし處によりてバレットは、經濟學の一般的對象を方法論的に如何なるものと考へ、又如何なる方法論的原理に基いて、純正經濟學と應用經濟學とを區別し、更に純正經濟學を三部門に別たんとするかは、大體上理解されるのであるが、ヤハリ右に述べし處によりて察知される如く、彼が Manuâle に於て特に詳しく論述して居るのは經濟靜學である。それで此處に更に彼の

經濟靜學の概念が、精密科學的動機の要求に従ふて、如何に精密に規定されて居るかを、尙ほ少しく述べて置きたいと思ふ。

今物體の均衡の理論即ち一般の靜學は、既に二千年前にアーキメデイスによりて、只空間と力と云ふ二つの基本概念に基いて建設されたと同様に、パレトの經濟靜學は二つの基本概念即ち富の概念とオフェンミタ (Oleminia) パレト特有の用語に於いて經濟的財貨の所有によりて與へられる快感或は満足の意味するものである、但しかゝる意味のものとしては Oleminia と云ふ語は正當でないで、よろしく Oleminia と修正すべきであると思ふ。此の語は一般には採用されて居ない) の概念とを基礎として建設されて居る。かくてパレトによれば、生産と交換との間や、分配と消費との間に實質的差異は存在せず、經濟學の論究する一切の問題は、單一なる圖式に、即ち各々自分の欲求 (gusti) によりて動かされる經濟的主體 (homines economici) 間の對立と云ふことに還元され得る。併し經濟的主體の行爲は、欲求の衝動の下に於て行はれるものとして、自由でなく、之を拘束する羈絆がある。若し然らずば、各人は諸種の財貨を飽滿するまで獲得し得てあらう。そうして此處に羈絆となるものは、左の諸事實である。即ち經濟的財貨は有制限な制限された分限に於て存在すること、暴行、詐欺、偷盜、贈與等が行はれない以上は、等價のものが交換に於て與へられるに非らずば、何物も購入され得ると云ふこと、總ての生産は原料と勞働とを要すること、法制が一定の度合に於て個人を行爲を拘束すること、等々である。

かくてパレトの經濟靜學は、左の三部から成立するものである。其の一は欲求、即ち行爲を惹起する諸力を研究するものにして、其の二は障礙即ち反對する反動を研究するもの、そして其の三は其等の行爲と其等の反動との對立から生ずる均衡の形式或は方程式を研究するものである。私はパレトの經濟靜學の概念が、如何に精密的に精練されて居るかを示す爲めに、尙ほ彼の經濟的均衡の方程式に付て少しく述べたいと思ふが、紙面の餘白がない爲め省いて置く。更に彼の經濟動學の概念に就ても尙ほ少しく述べたいが、是れも同じ理由で省く。

さて以上述べし處によつて、パレトの經濟靜學の概念は如何に精密的に精練されて居るか、學ばれ、又夫れは恐くは今日までに精練されたる經濟靜學の概念の、最も精密なるものであると思はれる。そうして何人でも經濟靜學の概念を出來るだけ精密に精練せんとする以上は、パレトの概念の如きものを承認せざるを得まいと思はれる。更に彼の經濟動學の概念に就て考へるも、

夫れは形式的には餘程精密に規定されて居る。殊に連續的均衡を以て經濟動學の對象と見ることは、形式的に經濟動學の概念の最も精密なる規定であること認め得られる。併し實質的には、連續的均衡は無限に連續するものにして、到底研究し遂げられるものでなく、そうして科學的に意義ある研究は、結局バレットが經濟現象の運動と稱するものの研究に歸着するのである。要するにバレットの經濟動學の二部門別は、只形式上の區別たるに止まり、實質的には意義なきものである。そうして經濟現象の運動は、彼の解するが如き科學の概念に於ては、到底純科學的に研究され得るものでなく、其の研究は是れまでに述べし諸家の經濟動學の概念に於て見出される如く、大なり小なり哲學的又は實際的意義を混交せざるを得ない。されば吾人はバレットの經濟動學の概念によりて、形式的には大に科學的なる經濟動學の概念を學び得るが、實質的にはヤハリ何等教へられる處がない。要するに後に稍々詳しく述べる如く、所詮科學の新概念を形成するに非らば、經濟動學の概念を科學としての經濟學の根本の一部門の概念として、正當に確立することは出来ないと思ふ。

アモロンはさきに引用せる論文 *La meccanica economica* に於て、只連續的均衡を研究するもののみを經濟動學と稱し、經濟現象の運動を研究するものを經濟運動學 (*la cinemica economica*) と稱して居るが、夫は單に形式的に力學と類比して考へる以上は、バレットが兩者の研究を同じく經濟動學と稱するよりも一層正しいと思はれる。併し實質的研究の上から見れば別段に意義のない、只名稱上の區別に過ぎない。